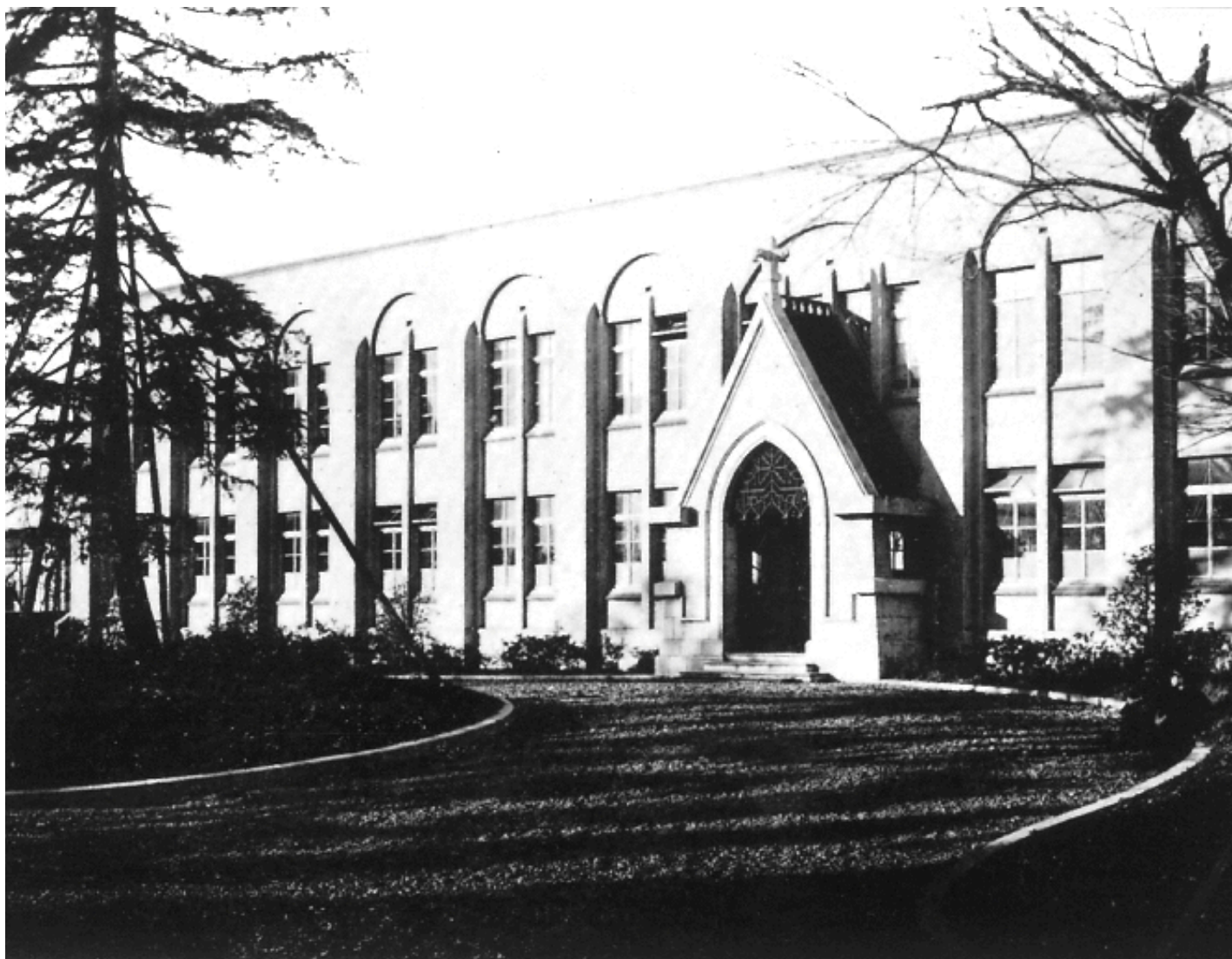


教養学部創立70周年記念

一高中国人留学生と101号館の歴史展



会場 1 東京大学駒場キャンパス101号館エントランス
会 期 2020年2月7日（金）～
開館時間 11:00～17:00（平日のみ閲覧可能）

会場 2 東京大学駒場図書館1階展示コーナー
会 期 ~~2020年3月20日（金）～4月2日（木）~~ 延期 開催時期未定

凡例

- ・旧漢字や変体仮名は、すべて現在の通行の字体に統一する。
- ・旧仮名遣いや踊り字は、そのまま残す。
- ・合字（コト、より等）は、2字に開く。

開催に寄せて

2019年、東京大学教養学部は創立70周年を迎えました。それを記念する行事の一つとして「一高中国人留学生と101号館の歴史展」が開催される運びとなりました。

101号館は、1936年に第一高等学校にて中国人留学生が学ぶ「特設高等科」専用の講義棟として建てられました。駒場には、他にも特設高等科専用の物理学・化学・生物学の特別教室が増設され、また特設高等科のための寄宿舎（明寮）が建設されていました。しかし現存しているのは、この101号館だけです。

当時の貴重な資料から、留学生たちがどのような思いを胸に日々学び、悩み、また日本人の学生や教師とどのような関係を築いたのかといったことに、ぜひ想いを馳せてみてください。

2020年2月7日

東京大学大学院総合文化研究科長・教養学部長 太田邦史

ごあいさつ

30年後の世界はどのようなになっているのでしょうか。それを想像するのはとても難しいことです。しかし、大事なことは、わたしたちがどのような世界を望むのかを一生懸命考えることです。この「わたしたち」とは誰のことか、そこから考えてみる必要があります。

2019年4月に発足した東アジア藝文書院（EAA）は、東京大学と北京大学が共同で30年後の世界を担う若い世代を育成し、東アジアから新しい世界を構想する学問の方法と成果を発信していくプロジェクトです。9月には北京大学で集中講義を開講し、両大学の学生が議論を交わし、新たな友情が生まれています。困難な状況を打開する力は、学問を通じた一人一人の友情であるに違いありません。

本展示は、第一高等学校時代の中国人留学生の教室であった101号館の歴史を紐解くものです。今新たにEAAの駒場オフィスがこの101号館に構えられたことの意義と責任を深く胸に刻みながら、EAAはわたしたちが望む未来を構想するための開かれたプラットフォームでありたいと願っています。

2020年2月7日

東京大学東アジア藝文書院長 羽田正

教養学部創立70周年記念 一高中国人留学生と101号館の歴史展

2019年4月に発足した東京大学と北京大学の共同教育研究プロジェクト「東アジア藝文書院（EAA）」では、東京大学教養学部の前身である第一高等学校における中国人留学生受け入れに関する歴史を紐解く「一高中国人留学生と101号館の歴史展」を開催することになりました。

明治32年（1899）、第一高等学校は、初めて清国より留学生8名を聴講生として受け入れました。これを嚆矢とし、明治36年（1903）には、文部省より京師大学堂からの留学生30余人の教養教育に関する一切の事務を委嘱され、翌年には留学生を入寮させ、授業も開始しました。さらに明治40年（1907）には、清国政府の要請により、文部省は毎年数十名の清国留学生を第一高等学校に入学させ、卒業後は帝国大学に進学させることと定め、その翌年に一高の予備教育を担う「特設予科」が設置されるに至ります。その後、昭和7年（1932）に「予科」が廃止されるまで、中国からの留学生延べ800名以上が卒業しました。同年「特設高等科」が設置され、ここで三年間学んだ留学生が各大学へと進学する途を開きました。

昭和10年（1935）に第一高等学校が駒場へ移転するにあたって、「特設高等科」の留学生たちの学舎となったのが、101号館です。EAAは、このような歴史的背景をもつ101号館に駒場オフィスを構え、本年度より東京大学と北京大学が手を携えあって、人類共通の未来を描くためのプロジェクトとして始動しました。これを記念し、本展覧会を企画いたしました。

また本年度は教養学部70周年の年にあたり、本展示もその一環として位置づけられるものです。この度の展示は、二つの会場で開催いたします。会場1（101号館内）の展示は、「特設高等科」が設置され、一高が駒場に移転してきた昭和10年（1935）前後の資料群（駒場博物館所蔵）が中心となっています。会場2（駒場図書館内）では、上記の資料に加え、中国人留学生の受け入れが始まった時期に校長であった狩野亨吉に関わる明治30年代（1897～1906）の文書類（駒場図書館所蔵）も展示いたします。いずれの展示も、駒場キャンパスに残された教養学部の前史を知ることができる貴重なものとなっております。

本展示が、歴史を鑑としながら、よりよい東アジアの未来を、引いては世界の未来を築いていくための「新しいリベラルアーツとしての東アジア学」構築と発信に向けての力強い一歩となることを祈念しております。

東京大学東アジア藝文書院（EAA）

会場1
(101号館エントランス)

展示品概要

1. 空から撮影された移転当時の駒場キャンパス

第一高等学校が駒場に移転してきた当時の新校舎の様子。既に、時計台のある本館（1号館）、特設高等科教室（101号館）、図書館（現・駒場博物館）、寄宿寮三棟などが建ち並んでいる。一方で、明寮が未建設のため、昭和11年（1936）から12年頃の撮影であろう。一高は本郷の地名・向ヶ丘に因んで「向陵」と称されていたが、昭和10年（1935）9月の移転式での森巻吉校長の命名により、地形が平坦な駒場も「新向陵」としてその名を受け継いだ。昭和12年（1937）の寮歌「新壑^{にひほり}の」には、「新壑^{にひほり}の此の丘の上、移り来^こし二歳^{ふたとせ}の春」と謳われている。

2. 第一高等学校平面略図

第一高等学校時代の駒場キャンパスの平面略図。敷地の東側に並ぶ横長の北・中・南寮3棟の北側に留学生のための明寮があった。駒場キャンパスの設計を引き受けたのは、本郷の東大および一高の建物のデザインを一手に担った建築家・内田^{よしやす}祥三。一高の駒場移転に際し、内田は「一高のためになるようにやるから」と約束。その言葉通り、駒場を本郷と同じようにデザインしただけでなく、高校生が喜びそうなアイデアとして雨天でも寮から傘なしで特設高等科教室、図書館、講堂などに行ける地下通路を建設した。これにより起床五分でトイレ、洗面、朝食を済ませ、教室の点呼に間に合わせるという離れ業も可能であったという。

3. 「特設高等科教室」図面

特設高等科が設置されたのは、駒場移転の3年前の昭和7年（1932）6月であった。学科を文理に分け、学科毎の定員を30名とした。満16歳以上の男子で、公使館や領事館の紹介書を添えて出願し入試に合格した者が4月に入学。特設高等科は留学生だけの課程で、本教室は特設高等科のための専用教室として建てられた。1階は事務室・主任室・教官室など運営機関と図画教室・語学教室、2階は大教室・普通教室があった。学科は一高の高等科とほぼ同じだが、国語の毎週授業数が二倍である点と、昭和8年（1933）以後、外国語にドイツ語が加えられた点が異なっていた。特高生は、ここで三年間、日本人向けの高等科と同等の教育を受けてから日本の各大学に進学した。

4. 「特設高等科 物理学・化学・生物学 特別教室」図面

本館（1号館）の左後ろ、現在の10号館のあたりにあった物理学教室の校舎の北側と西側に、特設高等科専用の物理学・化学・生物学の特別教室2棟が廊下で連結する形で増築される予定であったことがこの図面から知られる。2棟ともに「階段教室」と「実験室」の二種類の教室があった。空襲で焼失してしまったが、資料2に拠れば、実際にはこの図面と少し異なり、北側の校舎は左翼の先に直結する形で建てられていたようである。

5. 留日学生数および一高特設予科・高等科修了生数の統計

中国人留学生の受け入れの歴史は、明治29年（1896）に13名が東京高等師範学校に入学したことをもって幕を開いた。その後、留学生の数は増え続け、ピーク時の1905～06年頃には8000人に達した。日本の高等専門教育の水準を高く評価した中国側では、科举制度廃止（1905）に伴う教育改革を通して、日本留学もまたエリート養成の重要な手段と看做すようになっていた。明治41年（1908）に一高に設置された特設予科（一年間）の初の修了生は90名であり、浙江・湖南・広東からの学生が半数を占めていた。昭和7年（1932）に予科が廃止され、代わりに設置された特設高等科（三年間）の最初の修了生は13名であった。

6. 大正六年特設予科修了証書

特設予科の修了証書。留学生向けの一高の特設予科は明治41年（1908）4月に創設された。一年間の課程を了えると、高等科に進んで、日本人学生と共に学んだ。「第一部」というのは、文科に当たる課程で、第二部・第三部と比べて歴史の時間数が多く、図画の時間がない。この人物の出身地である江西省からの留学生は例年多く、広東、浙江、湖南と並んで、上位を占めていた（資料5参照）。特設予科は昭和7年（1932）に廃止され、代わりに高等科と平行して別立ての特設高等科が設置された。昭和12年（1937）には、特設高等科に付属予科も設置された。

7. 卒業写真（特設高等科）

昭和10年（1935）3月の特設高等科全部の写真。当時の校長は森巻吉で、前列中央に写っている。森と左右の教職員を除くと、57名の学生が写っている。特設高等科は三年制の課程であるが、三学年合わせての集合写真だろう。いずれも学生服姿で、眼鏡も目立つ。この写真を一目見ただけでは、「特高」の生徒、すなわち中国人留学生の集団とは思われない。それだけ、日本の学生生活に溶け込んでいたといえるだろう。

8. 特設高等科教室（101号館）の外観

旧特設高等科教室である101号館は、鉄筋コンクリート造2階建て、昭和10年（1935）3月に一部建設された後に増築され、昭和11年（1936）1月31日に完成した。『寄宿寮委員記録』（昭和10年5～7月）には、「特高ノ教室ノ建築モ進ミ両翼ガ今年中出来ルラシイ」とあり、増築したのは両翼部分だったことが知られる。当時は「特高館」と略称された。「東京帝国大学というものが一つのものであるから、それが一つであるような設計」にするという信念のもと、本郷と同様、駒場のデザインも担当した内田祥三^{よしかず}の設計。内田建築に特徴的な質素かつ剛健で強い形や線、玄関ポーチの様式が認められる。

9. 森巻吉と夏目漱石

漱石夫婦と森夫婦のおそらくはプライベートな写真。大正3年（1914）のもの。森は東大英文科在学中に漱石と出会っている。最初、森は、勿体ぶったように見えた漱石に対し反抗的であったが、次第に漱石の学殖に魅了され、自宅を訪れて教を請うようになった。森が大学を卒業した後、清国留学生の英語教師として一高に招かれたのは、当時一高でも英語を教えていた漱石の口添えがあったためという。漱石が教職を離れるまでの約二年半の間、二人は同僚であった。

10. 本郷から駒場への行軍

本郷の東京帝大の隣に位置していた一高は、駒場にあった農学部を近くに寄せて、本郷地区一帯において総合大学としてまとまろうとしていた帝大との間で用地を交換することとし、昭和10年（1935）9月に駒場に移転してきた。移転時の校長は森巻吉。生徒たちは、日露戦争の日本海海戦に際しての東郷平八郎の言葉、「皇国の興廃此の一戦にあり」をもじり、一高が「向陵」と呼ばれていたことから、「向陵の興廃この一遷にあり」と唱えた。9月14日の朝、本郷で訣別式が行われた後、森の「さあ行こう」の声とともに小銃をかついで武装行進が開始され、二重橋前、渋谷の繁華街を経て、約三時間をかけて、駒場に到着した。

11. 「一高前駅」の周辺を闊歩する一高生

昭和8年（1933）帝都電鉄が開業した当初は「西駒場駅」と「東駒場駅」があった。一高移転にもとない、「東駒場駅」が「一高前駅」に改称され、のちに「西駒場駅」も「駒場駅」に改称された。昭和40年（1965）に駅間距離が近かった両駅は統合され、現在の「駒場東大前駅」となった。木造の駅舎の横を、満開の桜道を颯爽と一高生が歩いていた。制服や着物で駅に向かう姿は、現在の駒場東大前を彷彿させる通学風景であった。

12-1, 2. 寮の廊下で隔てられた自習室と寝室

寮は廊下を挟んで自習室と寝室（四人部屋）が並ぶような構造であった。ベッドは万年床で、試験が近くなると、一高生は消灯後「家を脊にして居る蝸牛の様に、蒲団の中から頭だけ出して、蠟燭の光で勉強してい」たと言う。また、コンパを開催したり、ストームを興ずるなど、寮ならではの集団生活を送っていた。とりわけ一高名物のストームは、新入生にとって恐ろしいものであった。夜中に銅鑼を鳴らし、荒々しい声で歌いながら就寝中の新入生を起す先輩たち。「寝た振りをして、昼から蒲団諸共引きずり落とされる奴もある」ほど、いまでは考えられない大騒ぎな行事であった。「一晩にストームが二三回来る事も稀ではない」（『向陵誌』1939年版）。

13. 留学生・張興漢の活躍（昭和7年（1932）5月の春季運動会にて）

一高は体育活動が盛んであり、留学生も積極的に関わっていた。運動会や対三高戦など、一年中様々な試合を行っていた。なかでも、春季運動会は陸上運動部主催で、毎年5月下旬の土曜に開催されていた。本写真に写る張興漢は吉林省出身で1912年生まれ。運動は唯一の趣味であり、陸上競技に相当自信があり、中学校時代は陸上運動部および籠球部の委員、主将として活躍したほどの健児であった。中学校卒業後来日し、昭和7年（1932）4月に一高の入学検定に合格した。同年5月7日の春季運動会では、寮生の部に出場し、2分21秒で800メートル走に優勝した。翌月には特設高等科が設置され、その文科に編入した張は陸上部に入部し、猛練習に励んでいた。笑顔で楽しそうに走る張興漢の姿を記録した、貴重な一枚となる。

14. 留学生・張興漢らの優勝写真（昭和11年（1936）2月18日）

張興漢の活躍は止まらず、対三高戦でも鮮やかな成績を取めた。昭和10年（1935）夏の対三高戦において、彼は400メートル走と800メートル走に出場し、それぞれ54秒2、2分6秒8で優勝した。ちなみにその年一高は陸運、端艇、野球、庭球の対三高四部全勝を遂げた。本写真はそれを記念するために撮られたものと思われる。裏には、張興漢（後列左から一番目）、趙星元、孫浩善、劉世超（後列右から一番目）の名前が記されており、前列の真ん中は森巻吉校長である。また、劉世超（旅順出身、1917年生まれ、特高理科）も運動が得意で、昭和11年（1936）夏の三高戦では、800メートル走と3000メートル走で見事優勝し、一高対三高、陸上5年連勝に貢献した。

15. 留学生の寮生活と日本人学生との関わり

昭和11年（1936）4月16日、森校長は特設高等科の生徒を収容する寄宿寮がない点を「多大ノ困難」と訴え、文部省と外務省に至急予算に計上し工事に着手したい旨を通知している。寮内新聞『向陵時報』86号（昭和11年9月17日）で中寮の杉山伊佐武は、「新向陵」を礎くにあたり留学生問題が最も重大な課題であり、寮の自治を妨げかねない状況にあると述べ、留学生の疎外感や孤独を推し量り、日本人側から積極的に歩み寄る努力をすべきであると訴えた。これに対し、翌月号で蔡耀祺は「我々は淡泊にこれを受入れて、一考すべき」「深く感謝の意を表する」と応答した上で、留学生側が「寮生活の無意義」を感じている点を問題視し、より深く「寮生活」に「突入」し、その意義を掴むことが必要であると述べている。一方で、留学生の中で「一高精神」のように「特高精神」と唱え、議論する者があること、「特高組選」が成立して既に野球・蹴球・籠球の組選が組織され、日々練習に打ち込む姿があること、また第四寮（明寮）ができることなどへ希望を見出している。寮内新聞でのやり取りからは、彼らが当時抱えていた問題、そしてそれに対し冷静に見つめ、互いに理解し歩み寄ろうとしていた姿がみてとれる。また、明寮の建設がいかに留学生たちにとっても待望であったかが知られる。なお、明寮が完成したのは昭和12年（1937）4月で、さらに翌年5月に増築された。

16. 現在の駒場キャンパスの航空写真

2014年11月21日に、ドローン（DJI Phantom2）に小型カメラ（GoPro）を載せて撮影しされたもの。駒場祭の前日で、キャンパス中にテントが張られている。地面が少し濡れており、雨が上がった後の撮影であったようである。資料1の航空写真と比べると、当時の建物として本館、博物館（一高時代の図書館）、101号館が残っていること、また銀杏並木をはじめ木々が成長し、美しく色づいている様が確認される。翌年2015年12月10日より法規制が義務化され、人口密集地域でドローンを飛ばすことはできなくなった。今となっては貴重な一枚である。

（宇野瑞木・高原智史・宋舒揚）

会場2

(駒場図書館1階展示コーナー)

「清国留学生受け入れの始まり」(田村 隆)		8頁
「清国留学生受け入れの準備と提携」(川下 俊文)		11頁
「清国留学生の学業」(鶴田 奈月)		14頁
「景定成の一高留学と革命運動」(川下 俊文)		17頁
「一高における特設高等科設置と一高の駒場移転」(高原 智史)		18頁
「一高における日中学生の交流」(宇野 瑞木)		20頁
「一高における体育活動と中国人留学生」(宋 舒揚)		23頁

清国留学生受け入れの始まり

東京大学教養学部の前身は旧制第一高等学校（一高）である。その前身、官立東京英語学校および東京大学予備門の時期を経て、明治19年（1886）に第一高等中学校が創立され、明治27年（1894）に第一高等学校と改称された。

それから4年後の明治31年（1898）11月に、校長として狩野亨吉（1865～1942）が着任した。一高における中国人留学生（当時は清国留学生と呼ばれた）は狩野校長時代に始まったため、東京大学駒場図書館所蔵の狩野亨吉文書の中には、清国留学生関連資料の一群が含まれる。

一高における清国留学生の受け入れは明治32年9月に始まった。このときは浙江省からの留学生8名を聴講生として受け入れる形で、一高入学式の式辞において、狩野校長が留学生についても触れている。一高がまだ今の農学部がある本郷の弥生キャンパスに置かれていた頃である（駒場へは昭和10年（1935）に移転した）。続いて明治37年1月には、清国政府から派遣された京師大学堂（北京大学の前身）の学生31名が入学した。学習課程や寄宿寮の規約などは日本人学生に倣いつつも、学習サポートとして軽井沢で夏期講習を開講した記録なども残っている。ここでは狩野亨吉文書中の報告書や覚書などからうかがい知れる、中国人留学生受け入れの草創期について紹介する。

ちなみに、他校でもこの時期に留学生受け入れが開始された。魯迅（1881～1936）の「藤野先生」（1926年）の冒頭にも上野の満開の桜に集う辮髪姿の清国留学生が描かれる。東京高等師範学校の校長だった嘉納治五郎（1860～1938）が清国政府の依頼で明治35年に作った弘文学院の学生達とされる。魯迅自身も同年から2年間通った。また、今年のNHK大河ドラマ「いだてん」の第6回「お江戸日本橋」には、1911年の辛亥革命に際し、嘉納校長（役所広司）が在学中の清国留学生の身を案じ、帰国を思いとどまるよう説得するシーンがあった。

尚、東京大学では現在、学内の学術資源をデジタル化して広く公開することを目的とした「東京大学デジタルアーカイブズ構築事業」が進んでおり、今回展示する資料の一部もすでに科研費によるデジタル撮影を終えている。今後、個人情報やプライバシーの問題に配慮しつつ、順次公開していくことを目指している。

（田村 隆）

「清国留学生受け入れの始まり」展示品概要

1. 「一高入学式式辞」

狩野亨吉が一高校長として初めて臨んだ明治32年（1899）の入学式の式辞と見られる。式辞中に「昨年余カ就任ノ際」という文言が見え、明治31年の着任の翌年、すなわち32年の式辞であることが確認できる。当時は9月入学。この年から始まった清国留学生受け入れ（この年は聴講生8名）に触れ、「殊ニ今年ハ初メテ支那ノ留学生ヲ本校ニ入学セシメタル際ナレハ尤モ注意シテ善隣ノ道ヲ欠クコトナカランコトヲ務メヨ」と呼びかけている。ただし、『校友会雑誌』第89号（明治32年9月30日）に紹介された校長告諭にはこの一節がなく、全体にわたって表現の異同がある。推敲を経て大きく書き改められたのであろうか。

2. 『校友会雑誌』第90号

本誌所収の「入寮の清国遊学生を迎へ且つ之に告ぐ」では、古来中国の文化から多くを学んできた日本の「校友諸兄、寮生諸子」が今は留学生の「其偏狭なる見解を広め」ることに努めるべきであると述べ、「清国遊学の諸子、諸子若し、内に包蔵する意見有らば、冀くは無遠慮に開陳発露せよや、敢て或は蔵匿する有る勿かれ、此実に吾人の傾聴せんと欲する所のものなり。迂紆曲折、牆を寮生に城くが如きは、我自治寮の大禁物にして、諸子の為めに取らざる所也」と呼びかける。文中には「奮て善隣の遊学生のため」という一句があり、一月前の入学式における狩野校長の式辞を意識したものかもしれない。

3. 『清国京師大学堂留学生ニ関スル第一年報告書』（草稿）

清国留学生に関する明治37年（1904）の報告書の草稿。狩野校長から文部大臣久保田譲宛。「日語ノ教授法ハ教科書ニ由ルト口授ニ由ルト並行セシメ留学生ノ解シ難キ場合ニハ清語ヲ用キテ説明ヲ加フルコト、セリ」といった科目ごとの教育方針のほか、学科試験の頁には委員として、「英語」は夏目金之助（漱石）、「日語」は杉敏介（後の一高校長。『吾輩は猫である』の津木ピン助のモデル）の名が見える。「修学旅行及び遊覧」として、上野公園・動物園、「各省官衙」など近隣の他、鎌倉、小田原、軽井沢などにも出かけたことが知られるし、留学生の健康面については、吃音の学生を「六月十五日ヨリ同三十日ニ至ル 吃音矯正ノ為メ伊沢修二方ニ寓ス」といった報告もある。『小学唱歌集』や吃音研究で著名な伊沢修二（1851～1917）である。

4. 『校友会雑誌』第133号

「清国留学生の入校」の記事内に、一高倫理講堂における狩野校長の訓示が引用されている。「一月十六日狩野校長は生徒一同を倫理講堂に会して、告ぐるに其の委曲を以てし、論して曰く」とあり、「今回の事たる実に清国にとつての其の開発の一新紀元たるべきのみならず、我国家百年の大計の存する処たらずんばならず。一千の校友諸君願くは双手を開いて千里負笈の客を迎へよ、赤誠を吐露して遠来三十の友に接せよ」との訓示が載る。先に紹介した報告書の「訓示」の項に「一般留学生ニ対シ修学ノ心得ニ関シ訓示ヲナスコト二回、一回ハ学科始業ノ際ニ於テシ一回ハ当校学籍ニ編入スル前ニ於テセリ」とあるから、本誌掲載の1月16日の訓示は一回目の方であろう。

5. 留学生教科書一覧

第一高等学校の用箋に記された留学生用の教科書一覧。一枚物の方は「明治三十七年清国京師大学堂留学生教科用書」「七月以前日語科」とあり、坪内雄蔵（逍遙）『国語読本』や藤岡作太郎『日本史教科書』、巖谷季雄（小波）『癩取物語』などが挙がる。綴りの方には「九月以後ノ各教科書」の頁があり、科ごとに留学生の名を記した上で、各教科書が挙げられる。そのうちの一冊、「斎藤氏英語会話教科書」を併せて展示する。独乙語（ドイツ語）の教科書は「第一高等学校文学科教員選定独乙語読本巻ノ一」とあり、自前の教科書を用いたようである。上記のうち、「国立国会図書館デジタルコレクション」において公開されている教科書もあるので参照されたい。

6. 留学生鐘廣言の谷山初七郎宛書簡

鐘廣言の名は報告書の中に「第一部速成」所属生として見え、「月次学期試験点数表」にも成績が記録される。文面は、今用いている英語読本を読み終えた後の教科書について率直に相談するものである。「私共ハソノ本ヲ読ンダラソノ第三ノ代リニ（斎藤会話文法）ヲ読ムコトヲ願ヒマス」とある。「斎藤会話文法」とは、教科書一覧とともに展示している斎藤祥三郎編『英語文法会話作文』を指すと思われる。文末の「森先生」は英語の森巻吉のことか。「其会話文法ハ即チ今一部ノ方ガ五島先生カラ習ツテ居ル読本デス」とあるから、そこで評判のよい教科書なのであろう。緒言には、「本書は英語の学習を始めてより半年乃至二年以上を経たる人に文法、会話及び作文の諸科を併修せしむるに便せんが為に編輯したるものなり」とある。

7. 夏季講習講師出発及授業開始等予定

報告書には、「是ニ於テ夏期暇日ヲ廃シテ授業ヲ継続シ前陳ノ目的ヲ貫徹センガ為メ土地高涼衛生宜シク勉学ニ適スル信州軽井沢ノ地ニ宿舍及ビ教場ヲ借入シ」云々とある。7月13日に留学生30名で東京を発って軽井沢に到着、15日から授業が開始された模様。報告書に「数学十二時間」とある「沢田講師」（沢田吾一）について行程を確認すると、「七月十四日東京出発翌日ヨリ授業」（報告書の記述と符合）、「七月十九日朝授業ヲ終リ直ニ帰京二十二日又軽井沢ニ至リ同日ヨリ四回授業」。

8. 私費留学生月費の領収書

私費留学生月費の領収書。二枚とも明治38年（1905）3月3日付で、発行者は生徒監谷山初七郎。一枚は15円を「但私費支那留学生李福恒二月分月費」として、もう一枚は6円を「但支那私費留学生王蔭泰一月、二月両月分月費」として領収したことを証するもの。二人とも私費留学生のため、官費生の報告書には登場しないが、王蔭泰については別ケースに展示される名簿に名が見える（希望学科は工科）。一ヶ月分の月費にかなり差があるのが不審だが、学年・課程や受講科目等の違いによるものか。

9. 『清国京師大学堂留学生ニ関スル第二年報告書』

二年次にあたる明治38年（1905）の報告書。展示個所では留学生の食事に関して、「寄宿寮内ニテハ已ニ食事ヲ日本料理ニ改メタリ下宿ニ就クモノハ殆ド初メヨリ本邦ノ食事ヲ用キシナリ而カモ既ニ習慣トナリテ別ニ故障ヲ生ジタルコトアラズ」といった観察が示される。「帰国ニ関スル事」では、今年は留学生の夏休みの帰国希望者が多いため、昨夏も実施した軽井沢での夏期講習に支障をきたす点や、帰国に要する旅費負担の問題などが報告されている。明治38年6・7月の帰国学生18名の中には、先に書簡を紹介した鐘廣言も含まれる。

10. 『朝華夕拾』所収「藤野先生」

魯迅の「藤野先生」（1926年）冒頭には清国留学生が登場する。「上野の桜の爛漫たる時節には、眺めやれば確かに緋色の軽い雲のやうであつた。だがその花の下には団体を組んだ「清国留学生」の速成班が必ず陣取つてゐて、頭のでつぺんに辮髪をぐるぐる巻きにし、学生制帽のでつぺんを上につんと、まるで富士山のやうな恰好に突きあげてゐるのだつた」という一節がある。「速成班」については、原文にも「『清国留学生』的速成班」とある（1953年の人民文学出版社版（第5次印刷）による）。彼らは一高生ではなく、嘉納治五郎（1860～1938）が設立し、魯迅自身も通つたことのある弘文学院速成班の学生と考えられている。

清国留学生受け入れの準備と提携

日清戦争（1894～95）後、清国政府は国政改革のために新しい学術の摂取を急務とし、中国史上初の総合大学である京師大学堂（北京大学の前身）を光緒24年（1898）に創立した。一方、西洋の学術を学ぶことのできる手近な留学先として日本が注目され、明治31年（1898）5月に浙江省から派遣された留学生が東京に到着、6月23日には清国より姚錫光・黎元洪（のち中華民国大總統）が一高を視察に訪れる。これを契機として清国学生の一高留学が始まったが、狩野亨吉校長は留学生受け入れに際して関係各処との折衝を行っており、現存する書簡群からその様子を読み取ることができる。

上述の浙江省派遣留学生は、東京帝国大学文科大学教授・高楠順次郎（1866～1945、仏教学者）が創設した日華学堂にて予備教育を受け、翌明治32年9月に一高へ入学した。これに先立つ6月には、高楠から狩野に対して留学生受け入れに関する面談を求める書簡が出されている。この年の留学生のうち、章宗祥（1879～1962）は日華学堂から一高を経て東京帝国大学法科大学に学び、帰国後は京師大学堂で教鞭をとった。中華民国成立後、司法総長・駐日公使などの要職を歴任し、中国近代史に名を残した。

明治37年（1904）の清国留学生は、清国政府が京師大学堂の学生のうち優秀な者を選抜し、ヨーロッパ諸国および日本へ官費留学を命じたものである。彼らは帰国後、章宗祥のように京師大学堂の教官となるよう期待されていた。この派遣に際して、章が留学生の渡日を引率したほか、京師大学堂の日本人教官である服部宇之吉（1867～1939、中国哲学者）・巖谷孫蔵（1867～1918、法学者）が、学生の選抜や、留学生章程（規則）の起草、清国管学大臣との折衝などの実務にあたった。服部・巖谷は狩野に清国政府の動向を伝え、狩野からは留学生の様子を報告を受けた。例えば官費生の曾儀進が学資を家計へ回そうとした一件が契機となって、服部らは管学大臣に貧窮者家庭への援助を求め、狩野は曾の留学年限短縮希望を認めて京都帝国大学への早期進学を実現させた。このように狩野と服部・巖谷は日清両国にあって提携し、留学生の学業に便宜を計ろうとしたことがうかがわれる。

以上、省や政府といった公的機関の派遣による留学生について述べたが、実際にはこれらの他にも複数の私費留学生が一高に入学している。例えば官費生の選に漏れた京師大学堂生である施恩曦・葉克敷は私費留学を決意し、服部はこの両名のために狩野への紹介状を書いている。これら私費留学生の動向については『第一高等学校六十年史』（1939年）を始めとする先行文献でも見落とされており、今後の解明が待たれる。

（川下 俊文）

「清国留学生受け入れの準備と提携」展示品概要

1. 高楠順次郎書簡

一高が初めて清国留学生を受け入れるに先立ち、日華学堂総監・高楠順次郎が狩野亨吉に面談を求めたもの。具体的な用件は不明ながら、「至急」の相談とある。実際に留学生が一高の聴講生になったのは、新学年の始まる9月のことである。高楠は東京帝国大学文科大学梵語学講座初代教授、翌明治33年（1900）には東京外国語学校校長をも兼ねる。明治31年の浙江省派遣留学生を引き受けたことを契機に日華学堂を創設し、嘉納治五郎の弘文学院と同様に、広く清国留学生を対象にして日本語および普通学の教育を施した。

2. 章宗祥書簡

明治32年（1899）に一高へ留学した章宗祥が、明治37年留学生の引率者として再来日した際に、狩野を始めとする一高の恩師たちと旧交を温めたことへの礼状。章は一高・帝大で学んだ最初の清国留学生の一人で、帰国後は京師大学堂進士館（現職官吏に対する教育課程）の教習（教授）に就任。中華民国成立後は司法総長などを経て駐日特命全権公使となるが、民国8年（1919）の五・四運動において親日的政策を糾弾され失脚、以後は実業家として暮らした。なお、章の次代の司法総長に就任したのは明治37年（1904）留学生の張耀曾である。

3. 服部宇之吉書簡(1)

官費留学生31名を一高へ派遣するにあたり、参考資料として留学生章程・京師大学堂の試験成績表を狩野へ送付するとの内容。また、留学生に不平や「心得違い」を起こさせないように留意することや、留学生の学力が一様でないため「多少変通の法」を用いて教育することなど、懇切な指示が書き連ねられている。服部は帝国大学文科卒業後、北京留学中に義和団事件に遭遇、日本公使館に籠城した経験をもつ。留学を終えて東京帝大文科教授に在任中、明治35年（1902）に京師大学堂師範館（教員養成課程）の総教習（主任教授）に就任。留学生派遣においては巖谷孫蔵とともに大学堂側の実務を担当した。

4. 京師大学堂官派外洋留学生章程

資料3に同封。留学生の学科選択や生活など全般にわたる規則で、服部の起草に係る。留学生の選抜基準に「忠君愛国之誠」を挙げ（第二条）、留学中はいかなる時も「国家」の二字を忘れないよう求め（第九条）、帰国後は留学期限に応じて管学大臣の命令により「当尽之義務（まさに尽くすべきの義務）」に従事するよう定める（第十条）など、官費留学生としての使命を繰り返し強調している。なお、狩野亨吉文書のうち『清国京師大学堂派定留学生ニ関スル書類』一綴の中には、清国留学生の（主に政治運動に対する）取締を定めた「約束遊学生章程」および留学生帰国後の登用方針を定めた「鼓励遊学畢業生章程」の日本語訳文が含まれ、互いに参照することができる。

5. 服部宇之吉書簡(2)

服部が、留学生に関する管学大臣との折衝について狩野に知らせた書簡の一つ。官費留学生・曾儀進が一時帰国し、支給された学資を家計に回そうと管学大臣に相談したが断られ、この一件が新聞報道されてしまった。管学大臣は怒り、「留学生学資の事ニ関し彼是申出づるハ甚だ事体を知らざるものなり今後右様の者あらば早速当地大学堂に送り歸し処分を受けしむべし」との訓令を発する。服部はこれで問題は落着いたと受け取りながらも、根本的対策として留学生のうち貧窮者家庭に対しては国庫による補助を行うべきだと考え、管学大臣へ申し入れるつもりであると狩野に伝えた。資料6にある通り、曾は留学期限の短縮を願い出ているが、本資料に見られるような経済的事情が背景にあったと考えてよいだろう。また、同書簡後半では政府有力者某の甥が日本留学を希望していることを伝え、「日本の為め他日利少ならず」として受け入れを要請している。狩野は受け入れに前向きな返事の下書きを残しているが、姓名未詳のため、その後の動向は不明。

6. 巖谷孫蔵書簡

官費生の留学年限の延長・短縮については管学大臣の認可を経るよう定められているが（留学生章程第五条）、本資料は管学大臣が年限変更の許否を狩野に一任したことを伝えるもの。ただし年限変更はあくまで特例であり、今後の通例とならないよう留意を求めている。これにより、曾儀進は留学年限の短縮が認められ、翌明治38年9月に京都帝国大学法科大学へ進学した。ともに進学した5名連名の書簡も現存する（次コーナー、資料7）。巖谷は京都帝大法科教授に在任中、服部宇之吉と同じく明治35年（1902）に、京師大学堂進士館の総教習に就任。服部とともに留学生派遣の実務を担当した。

7. 服部宇之吉書簡(3)

官費留学生の選に漏れ、私費留学を決行した京師大学堂生・施恩曦を、官費生とともに一高へ入学させるよう狩野に紹介するもの。同じく京師大学堂の私費留学生・葉克敷のための、同日付の紹介状も現存する。なお、官費生のうち1名の病死により、施は明治39年（1906）2月から官費生に昇格した。次コーナーにある通り、明治37年1月に入学した清国留学生のうち、私費生は施・葉を含めて5人いた。さらに当時の『第一高等学校一覧』所載在校生名簿から、その他にも私費生が複数入学していたことが窺われるが、彼らの動向には未詳の点が多い。

清国留学生の学業

清国留学生は一高在籍中、どのような教育を受けたのか。当時校長だった狩野亨吉が文部省に宛てた報告書及びその他資料から詳細にみていく（補足資料「清国留学生年表」も参照）。

明治37年(1904)、一高が受け入れた留学生は清国から正式に派遣された官費生31名と私費生5名の計36名だった。帝国大学に進むための準備として一高に留学したのである。来日して間もなく全員が学校の寄宿舎に入り、専ら学力試験の日語日文の成績に従って甲乙丙の三組に振り分けられた。そして本科生と同じ授業を受けるために、まずは留学生のみの特別学級にて、9月の一高正式編入までの約半年間、日本語を重点的に学んだ。初期の週ごとの授業時間数は、日本語、日文、体操の三科目を以て甲組が20時間、乙・丙組が18時間。4月には志望科別に数学と歴史を加え、夏には夏季休暇を返上して軽井沢で授業を受けた。

9月以降の組について、『第一高等学校一覧 自明治三十七年至明治三十八年』では「外国人特別入学生」として全員が本科生と同級に在籍したように記されている。ところが狩野の報告書によると、実際は本科生と同級の他に、希望して留学年限を延長した学級、それとは反対に早く帝国大学に進ませる速成学級とに分かれたようである。また学級によって週ごとの授業時間数も異なり、学校は教官に嘱託して留学生のために特別授業を行ったとみられる。第一部一年一之組(英法科)を例に、本科生のカリキュラムと比較してみる。本科生が毎週計30時間であるのに対し、留学生は23時間となっているが、若干名を除いて6ないし8時間の日本語が加わり、合計時数は本科生と大きく変わらなかった。次年度の明治38年(1905)9月になると、確認不可の一名を除く全員が進級し、一年は二年に、延長学級は一年に編入し、速成学級は東京帝国大学または京都帝国大学の選科に進んでいった。

狩野亨吉が明治39年(1906)4月に京都帝国大学に転任したため、狩野文書から清国留学生のその後を辿ることは難しい。しかし、『第一高等学校六十年史』(1939年)によると、張輝曾は司法総長、王桐齡は北京師範大学教授、余榮昌は大理院庭長、朱深は大審院検事総長となったことが判明している。また景定成のアナーキストとしての活動は自著『罪案』(国風日報社、1924年)(抄訳は、景梅九(景定成)著、大高巖・波多野太郎訳『留日回顧—中国アナキストの半生』東洋文庫81、平凡社、1966年)に詳しい。

(鶴田 奈月)

「清国留学生の学業」展示品概要

1. 留学生名簿

明治37(1904)年1月に来日した清国留学生32名分の名簿。氏名の上に○印がついている5名は私費留学生。全員が京師大学堂の学生だが、「学位」の項目に「州判知州ヨリ第三位ノ地方官」や「挙人郷試及第者」などがあるように、身分も年齢も様々だった。「学科」以下の項目は留学以前に京師大学堂で修めた内容を記したものと考えられる。記載されていない4名の氏名が、遅れて到着した者と一致することから、名簿作成の時期は32名が入寮した1月17日から、後から到着しはじめる2月1日までの間と推定される。

2. 学力試験 書取解答

明治37(1904)年1月23日から25日に行われた学力試験の解答と推定される。名簿と同じく到着が遅れた4名の解答がなく、32名分の解答が現在保管されている。解答にはひらがな、カタカナ、漢字の表記が統一されておらず、指定されていたかは不明。しかし、全解答を通して書かれた文章が一致するため、おそらくは試験官が読み上げた文章を留学生が書き取ったものであろう。点数のひらきが大きいことから、留学生たちの日本語の習熟度にばらつきがあった様子をみてとることができる。

3. 『清国京師大学堂留学生ニ関スル第一年報告』

明治38年(1905)1月、一高校長狩野亨吉が文部大臣久保田譲に宛てた報告書のガリ版刷り。明治37年中の清国留学生に関する各授業日程等が具に報告されている。本資料には報告書の他に、遊学生章程の訳文、京師大学堂の試験採点表、各試験採点表、特別班および各学級振り分け、学科および年限の希望や変更一覧等の書類が綴じられている。なお、報告書には私費留学生の名前が一切記されていないが、これらの書類には官費生と同様に記録され、実務上では区別されていなかったと考えられる。

4. 「登浅間山観噴火口」(『校友会雑誌』第167号)

清国留学生、范熙壬が一高生による学内誌『校友会雑誌』に寄せた紀行文。冒頭の「甲辰八月二十四日」より、明治37年(1904)夏季授業中、博物学の授業の一環で浅間山に登った時の記録と推察できる。浅間山の話は景定成の自伝にも登場している。また『校友会雑誌』には、本記事の他にも、周宣「旅行江島鎌倉横須賀房州日記」第136号(明治37年4月28日)等、留学生による文章がしばしば掲載された。

5. 清国留学生書簡 (1)

清国留学生、朱獻文が校長狩野亨吉に送った書簡。「明年秋間送入西京大学」との言葉から、本書簡は明治37年に書かれたと推定される。文中の「西京大学」は京都帝国大学を意味し、事実朱獻文は速成組に編入、明治38年(1905)に法科(選科)へ進学した。三十歳にして「西文」の勉強に苦勞している様子が伺えるが、朱獻文は留学生の中でも珍しく二ヶ国語を学んでおり、ここでは英語または独語、あるいは両方を指していると考えられる。

6. 清国留学生書簡 (2)

清国留学生、杜福垣が校長狩野亨吉に送った書簡。自身の学力不足を理由に、自分を二年生へ進級させないよう願い出たもの。この希望に関して、明治39年(1906)作成の狩野の報告書に次のような記述がある。「一部二年四之組(独逸法科)ニ属スル者ハ留学年限ヲ延長シテ一年級ニ留ランコトヲ願ヒ出デタルモ其学力概シテ本邦学生ト並馳スルニ足ルヲ認メテ之ヲ許可セズ」初年度は試験の成績に関係なく、清国留学生たちは一律に進級した。

7. 清国留学生書簡 (3)

京都帝国大学選科に進学した速成組の5名から、京都に到着したことを報告した書簡。封筒に日付は記載されていないが、内容から帝大入学直前と推定される。差出人の進学先の内訳は法科4名、医科1名。狩野亨吉もこの翌年より京都大学へ転任となる。転任先においてどのような交流が行われていたかは不明だが、狩野亨吉は明治41年(1908)にも同連名の差出人から年賀状を受け取っている。

景定成の一高留学と革命運動

明治37年（1904）の清国留学生の一人・景定成（1882～1959、字：梅九）は、自伝『罪案』（1924年）で一高留学の回想を生き生きと描き出した。ここでは同書の抄訳『留日回顧 一中国アナキストの生涯』（大高巖・波多野太郎訳、東洋文庫81、平凡社、1966年）に基づき、景の事績を紹介する。

景定成は山西省安邑県に生まれ、京師大学堂師範館で服部宇之吉らに西洋の学説を学んだ。その傍ら、日本へ渡った留学生が発刊した革命派の雑誌を読んで共感し、日本渡航を志す。首尾よく官費留学生に選ばれて一高へ到着するや、日本人学生に辮髪をからかわれ、理髪店に駆け込んで一思いに断髪した。先に来日していた留学生が開いてくれた歓迎会の席で、景は出身省の違いを乗り越えて団結することを訴える。軽井沢での夏期講習の際には、留学生一同で浅間山の火口まで登ったが、その途中で女子学生の一行に出会った景は、日本人女性の健脚と冒険精神に驚き、帰国後は纏足習慣の廃止を訴えることとなる。日露戦争中の東京で、景は愛国心を訴える演説会に出かけて慷慨するとともに、弁士が日清戦争の勝利を引き合いに出すことに屈辱を覚える。

明治38年（1905）8月、孫文が革命派を糾合して東京で中国同盟会を結成すると、夏期休暇の一時帰国から戻ってきた景はこれに参加し、革命を支援する宮崎滔天らと交流した。しかし留学生の革命運動への接近を恐れた清国政府の要請により、日本政府が文部省令第十九号（11月2日）を発して留学生の素行取締を表明すると、留学生はストライキや集団帰国などの手段により反対運動を展開し、同盟会員の陳天華（法政大学留学生）は抗議の自殺を遂げた。

狩野亨吉校長が久保田譲文部大臣へ提出した明治38年分の報告書（『清国京師大学堂留学生ニ関スル第二年報告』）は、特に「取締ニ関スルコト」と題する項目を設け、谷山初七郎生徒監が留学生に対して政治運動への参加を厳に戒めたと記し、上述の留学生取締反対運動に対する一高留学生の関与を一切否定している。しかし景は政治集会への参加を続け、官憲による弾圧を目撃し、日本の立憲政体に対する疑念を抱く。そして幸徳秋水・大杉栄らに学び、社会主義・無政府主義に傾倒していった。

もともと景は数学を好み、帝大理科への進学を志望していた。しかし明治41年（1908）に一高を卒業後、進学せず帰国し、学校教員を務めながら革命運動に身を投じる。宣統3年（1911）に辛亥革命が勃発すると、景は山西省で民軍を組織し転戦、中華民国成立後もアナキストとして反体制活動を貫いた。

本展示で紹介した狩野亨吉文書からは、景定成たち清国留学生の政治運動について窺い知ることは難しい。興味を持たれた方は、ぜひ『留日回顧』を併せ読み、留学生が革命にかけた情熱を感じ取ってほしい。

（川下 俊文）

特設高等科設置と一高の駒場移転

昭和4年（1929）7月から昭和12年（1937）4月までの森巻吉（1877～1939）校長時代には、昭和7年（1932）6月の特設高等科設置、昭和10年（1935）9月の駒場移転が行われた。

一高では、明治41年（1908）に特設予科を設置して、中国人留学生を恒常的に受け入れることとし、1年間の予備教育を施し、修了後に、各地の高等学校へと進む道を開いた。特設予科は、20数年間に810名の修了者を出したが、昭和7年（1932）に特設高等科へと改編された。特設予科を廃しての特設高等科設置の理由は、従来、留学生の就学は、特設予科1年、高等科3年の計4年かかっていたところ、特設高等科の3年に一本化することで1年短縮し、速成を図ることであった。中国人留学生の獲得をめぐる、欧米との競争が生じていた中で、日本への留学をしやすくし、日本留学の魅力を高めるための措置でもあった。特設予科を了えた留学生は、その後、高等科で日本人とともに学んだが、特設高等科では、留学生だけのクラス編成となった。

特設高等科に入学できる資格は、満16歳以上の男子で、公使館などの紹介のある者とされた。学科試験は、日本の中学校第四学年修了の程度により、日本語、英語、数学、歴史、理科について行われ、志望先が文理いずれであっても、文理双方の知識が要求された。この他、口頭試験と身体検査があった。

入学後の教科は、日本人向けの高等科と比べて、日本語の時間数がより多かった他はほぼ変わらなかった。教科書も同じようなものを使用していた。例えば、国語の教科書は、『源氏物語』、『平家物語』、『枕草子』が共通して用いられており、特設高等科では『論語』を除けば、日本の古典文学が多くを占めた（資料3参照）。

昭和12年（1937）7月には、特設高等科の下に1年間の附属予科が設置された。この際、附属予科設置による留学生の日本語力の充実に応じて、科目としての「国語」を「国語及漢文」に改め、漢文を教授し、また「歴史」の時間の中で東洋史を教授して、東洋思想の涵養が図られた。

特設高等科を卒業した留学生は、その多くが京都帝大に進学した。京都帝大が留学生の受け入れに積極的な姿勢を示し、無試験での受け入れを方針としたからである。

（高原 智史）

「特設高等科設置と一高の駒場移転」展示品概要

1. 森巻吉履歴書

森巻吉が一高校長に採用された際の履歴書。金沢の第四高等学校入学から始まり、東京帝大文科大学卒業後の明治37年（1904）には「清国官費留学生英語授業ヲ嘱託ス」とある。明治42年（1909）には第一高等学校教授、昭和2年（1927）には松本高等学校の校長となっている。本資料の中には英語研究のための欧米留学や松本への赴任の度に「留学生講師ヲ解ク」とも記されているが、そのように一高を離れた時以外は、一貫して留学生教育に当たっていたことが見て取れる。

2-1. 特設高等科入学志願者選抜試験問題綴正本

2-2. 特設高等科入学志願者選抜試験問題綴副本

特設高等科が設置されて最初の昭和8年（1933）度の入学志願者選抜試験問題。配点は、文科と理科とで科目編成、配分ともに違いがない。文科、理科いずれを志願する場合も、文理双方の学力が要求されたといえよう。四つの日本語科目の配点が計200点、歴史が60点、化学が60点、数学が150点、三つの英語科目が計150点と、日本語の配点の比率が最も多い。「日語解釈」の問題は、答案が残されていないので不明だが、「昔の日本人はどんなに無駄な争闘と無価値の饒舌を嫌つたであらう」という風に始まるような日本語を留学生たちはいかように「解釈」したのだろうか。

3. 昭和15年度第一高等学校教科書目録

昭和15年（1940）度に一高で使われた教科書の一覧表。高等科、特設高等科に分けて各学年、科類ごとに、国漢、外国語、その他（理数）の科目について記載されている。特設高等科の国漢の箇所をみると、『論語』を除けば、一年生の『徒然草』から始まり、『源氏物語』、『万葉集』、『枕草子』など日本の古典文学が多く並び、漱石や鴎外、樋口一葉といった近代の作家の作品も出ている。

一高における日中学生の交流

一高をはじめとした旧制高校といえば寄宿寮生活である。一高の留学生も、基本的には本科生と同様に寄宿寮に入り、共同生活を通じて、その寮風すなわち校風である自治精神などを身に着け、日本人学生と相互融和することが望まれた。既に、特設予科が設置された明治42年（1909）の3月の寮総大会には、留学生も一般の寮生と同等の自治委員選挙権を持つことが決議されている。但し、留学生が委員会にどこまで参加したかについては不明である。また実際には、食事や生活習慣の問題を理由に通学を希望した留学生も相当数いたようである。例えば、特設予科が特設高等科へと改編された昭和7年（1932）度の留学生の在学学生数は107名で、そのうち在寮生は87名、通学者は30名であった（『向陵誌・駒場篇』1984年、47頁）。

学校側は、特設予科設置以来、留学生（当初は、特設予科生及び一高本科留学生）のために、年に一、二回「留学生茶話会」を催してきた。この茶話会は、留学生が普段の生活や勉学において直面する様々な問題を学校側に打ち明けるための場として設けられた。この他にも、寮生を中心に催される「全寮茶話会」や「全寮晩餐会」において、在寮留学生が自身の考えを演説する場面も見られた。しかし、校長・教員、全寮生・卒業生も居並ぶ中で本心を打ち明けることは難しかったのではないかと想像される。

留学生向けの課程が、一カ年の特設予科から三カ年の特設高等科に改編されると、特高生は日本人学生と独立したクラスで教育を受けることになった。これにより、それまでのように予科生が一高本科に入学し日本人学生と共に三年間学ぶ機会もなくなった。当時、在寮の留学生の孤独や疎外感、また留学生内の通学者の多さが問題視され、寮内新聞『向陵時報』では、特高生の蔡耀祺がこの問題について寄稿し、日本人学生と議論を交わすなどしている（会場1の資料15参照）。

このような中、日中学生の間に互いに障壁を乗り越えようとする努力が見られた点に着目したい。昭和9年（1934）4月に、日中学生がより気軽に親睦を深めるための「^{ていか}棣華会」が結成されたが、これは特高生徒主事の竹田復の支援のもと、日本人学生が発起したものであった点で特記すべき活動であったといえよう。この「棣華会」には先の『向陵時報』に寄稿した特高生の蔡耀祺も名を連ねていた。

（宇野 瑞木）

「一高における日中学生の交流」展示品概要

1. 特設高等科教室（101号館）と寄宿寮

本館から寄宿寮を眺めた様子。写真の一番手前に見えるのは、一高が駒場に移転するにあたり留学生専用の教室として建てられた「特設高等科教室（現・101号館）」である。当時のキャンパス略図（会場1の資料2）で確認すると、「特設高等科教室」と並んで建っていたのが「中寮」と知られる。この「中寮」の左側に二棟写っているのが「北寮」と留学生のための寄宿寮「明寮」であり、「中寮」の右側にわずかに写っているのが「南寮」である。「明寮」は昭和13年（1938）に増築し終えているので、この写真はそれ以降のもの。

2. 駒場移転直前の全寮茶話会

駒場移転を控えた昭和10年（1935）5月21日、嚶鳴堂にて「第一学期全寮茶話会」が催され、森校長をはじめ教授陣と卒業生・在寮生が参加した。特設高等科生徒主事・竹田復は、留学生に対する所感として、現在の「百一名」の特高生に対し、「一高生活ノ真髄」に触れさせるには入寮以外に手はないとし、実際多くの特高生が寮で「満足シテ生活」できているのは日本人学生の「心遣ヒ」の賜物と述べた。さらに「今日推戴サレタ対三高選手ノ中ニモ文科三年ノ張ト理科三年ノ蘇ノ二人ガ入ツテキル」と、対三高戦で活躍した張興漢（次コーナー資料1及び会場1展示13、14参照）や蘇景明を名指しで称賛している。寮生の演説においては、特高生の林坤義が、「特高ノ留学生トシテ自己ヲ深く考ヘ精神力ヲ握」み「将来共ニ東洋ヲ背負ツテ立ツコト」を強く呼びかけた。

3. 「寮生諸君の燈下に送る（読書調査）」

昭和11年（1936）11月に寮生に対し読書調査を実施し、269人分の回答の統計を採ったもの。著者別では、夏目漱石（66票）、ゲエテ（49）、トルストイ（43）、阿部次郎（37）、ドストエフスキー（29）、倉田百三（21）、河合栄治郎（18）と続く。近代文学と哲学書が多い印象だが、日中の古典も『平家物語』、『論語』（10票）、『源氏物語』（6票）、『古事記』、『奥の細道』、『孟子』（5票）等が挙がる。特高生がどこまでアンケートに参加したかは不明だが、日本の古典は国語の教科書として読まれたものと符合している（前コーナー資料3）。

4. 榑華会開催の案内と会則

昭和10年（1935）5月30日、午後五時半より「白十字」にて「榑華会」を開催する旨を知らせる案内状。「榑華会」は『詩経・小雅』常榑の一節「常榑の華たり。凡そ今の人兄弟に如くは莫し」から特設高等科生徒主事の竹田復によって名付けられ、日本人寮生が発起人となって結成された。「榑華」は兄弟仲が良いことに譬えられるように、「家族として兄弟として」、「虚心坦懐赤裸々」に相互の意見や希望を述べあうことが望まれた。会則には「留学生に関する諸問題を率直に懇談し渾然一なる寮生活の体現」を目的とし、寮生有志が毎月第一金曜に例会を実施することなどが見える。なお、「白十字」は芥川龍之介の小説にも登場する一高生行きつけの喫茶店。

5. 「東洋の抱く文化史的使命の完成へ——榑華会大会に際し寮生諸君に訴ふ——」

昭和11年（1936）6月15日、駒場移転後第一回目の榑華会春季大会の開催にあたっての声明文。昭和9年（1934）4月に発足して以来、榑華会は三回ほど開催され、一高移転に際し当時全寮生の関心の的「留学生関係諸問題」の实际的解決という使命を概ね遂行したと述べる。そして今、「新一高」の基礎を築くにあたり、単に留学生個人の勉学便宜の為に止らず「本科生と留学生の渾一融合を計り、より大いなる一高生活の完成を期」すことを寮生に向けて訴えた。末尾に発起人と思われる日本人学生と共に、茶話会で演説をした林坤義（資料2参照）や『向陵時報』で特高生としての意見を表明した蔡耀祺（会場1の資料15参照）の名が連なる。「旧榑華会委員、留学生自治団体同学会委員並びに本科生有志」という一節から、彼らが留学生自治団体「同学会」の委員として活動していたことも知られる。

6. 「東洋の文化使命——棣華春季大会」

資料5の声明文と同文が寮内新聞『向陵時報』第85号にも掲載された。昭和11年（1936）6月15日の午後六時より渋谷の「白十字」にて開催、佐々木生徒主事、竹田特高生徒主事など教員も含む30数名が参加した。声明文に名を連ねる日本人学生のうち、隅谷三喜男（1916～2003）は一高文科甲類在学中に寮総代会議長を務め、後に東京大学経済学部の教授となった。猪野誠治は、昭和9年（1934）の寮歌「空虚なる」の作詞者で駒場二代目寮委員長、陸上部の選手であった。終戦直後の昭和20年（1945）8月29日に戦病死。澄田智（1916～2008）は、資料2（『寄宿寮委員記録』）を記録した第137期寮委員長で、後に第25代日本銀行総裁、大蔵事務次官を務めた。

一高における体育活動と中国人留学生

校章のオリーブは智と美の神ミネルバ、柏葉は武神マルスを象徴するように、第一高等学校は文武両道の精神を重んじ、以て護国の基礎を築くことを目指していた。そのため、体育活動が盛んであり、運動部は野球をはじめ、撃剣、柔道、弓術、陸上運動、端艇（ボート）、水泳、庭球（テニス）、籠球（バスケットボール）、ア式蹴球（サッカー）、ラ式蹴球（ラグビー）、乗馬、相撲、射撃など十数部に及び、非常に充実していた。

新入生が入学してしばらく経った4月下旬に各部の勧誘活動が始まった。「我等新入生が机に噛り付いて予復習に余念がない夜分を利して行はれ」、委員たちが竹刀などを手にして寮の部屋を一つずつ回り、一人ひとり捕まえては入部を勧誘したという（『向陵誌』1939年版）。勧誘は数日間続き、これを機に新入生が各部について詳しく知ることになった。

これらの運動部に所属する一高生は一年中練習に打ち込み、春季運動会、端艇を中心に行う組単位の対抗試合である組選、インターハイ、対三高（第三高等学校）戦など、校内外さまざまな大会に出場し、腕を競い合っていた。なかでも、対三高戦は最も重要な対外試合と見なされ、競技だけでなく、数百人単位の応援団による盛大な応援合戦が繰り広げられていた。

体育活動に特設予科、および後の特設高等科に所属する中国人留学生も積極的に参加し、籠球やサッカー大会で優勝するなど、たびたび好成績を収めた。とりわけ陸上運動部において留学生の活躍が目立ち、張興漢、劉世超、孫浩善など、好走者を輩出していた。また、組選を日本育ちの留学生と中国本土からの留学生をつなぐ大切な場として、特高組選部屋の設立の必要性を力説した留学生もいた。彼らが一高生活になじみ、日本人学生と溶け合ってスポーツと青春を謳歌した様子がうかがえる。

強豪校として常勝を誇った一高は昭和25年（1950）廃校となったが、肩を並べて戦っていた仲間たちは1980年代以降、向陵訪中団（同窓会活動）や訪日考察団などをきっかけに再会し、過去の情熱あふれる一高生活を語り合った。半世紀以上の歳月を越えて、なお交流が続いていたのである。

（宋 舒揚）

「一高における体育活動と中国人留学生」展示品概要

1. 陸上運動部集合写真

一高の陸上運動は東京大学予備門時代から始まり、明治23年（1890）10月に一高校友会が結成した際には、陸上運動部も名を連ねた。以来、たびたび輝かしい成績を残していた。本写真は駒場時代の集合写真である。一段目左から4番目に森巻吉校長、二段目に特設高等科の中国人留学生の張興漢（昭和7年（1932）入学、左から5番目か）と劉世超（昭和10年（1936）入学、右から5番目）の姿がそれぞれ確認できたことから、昭和10年～11年頃に撮られたものと推定される。

2. 対三高戦応援団檄文

対三高戦は明治39年（1906）の野球戦に始まり、大正9年（1920）から陸上運動、13年（1924）から端艇と庭球が加わり、毎年四部で行うようになった。慣例として7月から8月にかけて東京と京都、あるいはその逆の形で一部・三部に分けて開催していた。対外試合の精華とも言われる対三高戦であったが、昭和10年（1935）8月の庭球戦における応援団同士の乱闘事件を受け、同年10月に一旦廃止することに決定した。翌年6月には寮内の議論および両校の交渉によって復活が決まり、例年通りに開催することができた。この檄文は同年の応援団推戴式の前に書かれ、寮の外壁に掲げられたものである。

3. 昭和十一年度対三高対校戦選手及応援団幹部氏名

対三高戦応援団の推戴式は大正15年（1926）5月に嚶鳴堂で初めて行われ、校長以下の学校幹部も出席した。最初は応援団長のみの推戴であったが、昭和3年（1928）からは応援団幹部、5年（1930）からはさらに選手も同時に推戴するようになった。一高の名誉を背負って戦う代表にとって非常に光栄な行事である。昭和11年（1936）の名簿には留学生の劉世超の名前も載せられている。陸上中距離走の選手であった。なお、推戴式の様子については、『向陵誌』（1930年版）に以下のように活写されている。

推戴式は概ね昼時間を利用して、倫理講堂に於いて厳粛なる雰囲気の中に挙行される。先づ野球・端艇・陸上運動・庭球の部順に従ひ、各部選手交々と壇上に立つて副委員長に紹介せられ、次いで各部の主将は必ず三高を撃破粉碎せんことを宣誓する。之が終れば生徒一同を代表して委員長が選手激励の辞を述べ、最後に四部応援歌と寮歌「嗚呼玉杯」を斉唱して、式の幕を閉ぢる。而も四部選手の列を正して退場する背後より、我等は「頑張れ」「必ず三高を敗れ」と咆哮する。選手は悲壮なる面持を以て、無言の儘全力を尽さん事を誓ふ。実に「風は蕭々として易水寒し、壮士一度去つて又還らず」の景其の儘である。

4. 対三高戦応援団写真

応援練習は例年6月中旬に昼休みを利用して行っていた。対三高戦は「学校一致の決戦」であるだけに、「選手の技倆よりも生徒の団結如何に戦の決は懸つて存する」（『向陵誌』1930年版）。白旗（対して三高は赤旗）を振ったり、太鼓を鳴らしたりしながら、応援歌を高唱する応援団の団員たち。試合の状況とともに両校の大規模な応援も過熱しがちで、しばしば紛争にもなった。本写真は昭和11年（1936）7月15日に行われた陸上戦における応援団の様子である。旗には源氏の白地に二本の線と一高のシンボルマークである柏葉章が描かれている。

5. 『向陵時報』対三高戦記事

昭和11年（1936）の対三高戦を詳しく報道した一面である。この年は野球を除いての三部勝利となり、3年連続の四部全勝こそなかったが、陸上は5年連勝、端艇は9年連勝を果たした。ちなみに『向陵時報』は大正11年（1922）6月1日に創刊され、当初は言論発表の機関誌として期待された。記事の内容が近い『校友会雑誌』との競い合いで翌年6月に廃刊となったものの、同年12月に新聞的体裁になって『寮報』に改称された。その後、昭和5年（1930）1月には新版『向陵時報』として発刊され、一高廃校まで存続していた。

6. 「百米」 出発！刹那!!

7. 対三高戦五年連勝全国高校大会制覇記念メダル

昭和11年（1936）7月15日、対三高戦の陸運戦は一高グラウンドで行われた。一高は12種目のうち10種目において勝利し、総合得点84.5対28.5の大差で三高を破った。陸運対三高の5年連勝となった。100メートル走は文科丙類の国分節夫選手が11秒5で優勝。2位は11秒9で理科甲類の益子洋一郎選手であった。また、一高陸運はこの年の全国高校大会（インターハイ）でも優勝を取めた。メダルはこの2大会の勝利を記念するために作られたものである。裏には「贈益子君」、「二五九六」（皇紀2596年、すなわち1936年）という文字が浮き彫りで刻まれている。

8-1. 春季運動会陸上運動部メダル（表）

8-2. 春季運動会陸上運動部メダル（裏）

春季運動会は毎年5月下旬の土曜日に開催される陸上運動部主催の大会であり、各種目と継走（リレー）の組選が行われた。ちなみに10月第一または第二土曜日には秋季運動会が開催され、同じく継走の組選があった。

9. 向陵訪中国東北地区旅行報告

劉世超は昭和11年（1936）の対三高戦の800メートル走と3000メートルに出場し、それぞれ2分7秒3と10分13秒2の成績をマークし、いずれも優勝に輝いた。その後、京都帝国大学医学部に進学し、1941年に卒業、1943年に帰国した。紆余曲折を経て故郷の大連・旅順の病院で医師として活躍し、結核病の予防と治療に尽力した。彼は1982年、1985年に2回大連医学考察団の一員として訪日した折に、陸上部の旧友十数名が東京・京都で歓迎会を開いたという。また、1994年秋に一高同窓会の会員らが第六回向陵訪中国を結成して中国東北の各地を旅行し、劉世超を含む中国在住の特設高等科同窓12名と再会を果たした。本資料はその際に、青春をともにした仲間たちが異国の地で寮歌「柏の旗」「嗚呼玉杯」を高唱する様子を記している。

関連年表

年	元号	月	第一高等学校の歴史	北京大学の歴史
1886	明治19	4	東大予備門から第一高等中学校と改称 (中学校令施行)	
1889	明治22	3	一ツ橋から本郷に移転	
1894	明治27	8	日清戦争	
		9	第一高等中学校から第一高等学校へ改称 (高等学校令施行)	
1895	明治28	4	下関条約	
1896	明治29	6		清国政府派遣留日学生の嚆矢（高等師範学校へ13人）
1898	明治31	4		* 嚴復訳ハクスリー『天演論』刊
		5		* 張之洞『勸学篇』発表
		6-8		戊戌変法
		11	狩野亨吉校長となる	
		12		京師大学堂開学。初代管学大臣孫家鼐
1899	明治32	9	清国浙江巡撫派遣の留学生8名、聴講生として一高入学 服部宇之吉、北京留学へ（文部省派遣の初の留学生）	
1900	明治33	6		義和団事件
1900		7	文部省直轄学校外国委託生に関する規程	
		8		京師大学堂閉校
1901	明治34	11	文部省直轄学校外国人特別入学規程	
1902	明治35	1		復校令。管学大臣張百熙
				服部宇之吉、嚴谷孫蔵、外国教習として招聘される
		2		* 梁啓超『新民説』連載開始
		8		欽定学堂章程（注1）
		12		速成科師範館、仕学館入学式
1903	明治36	5		訳学館、医学実業館設立
		12	京師大学堂派遣の清国留学生31名、一高入学決定	
1904	明治37	1	清国留学生入寮	予備科第一班学生入学
			寮総代会、留学生を寮生として遇すると議決	速成科学生31人が日本、16人が西洋へそれぞれ留学
				仕学館、進士館に合併
				奏定学堂章程
		2	日露戦争	
			清国留学生への授業開始	
		9	森巻吉、清国留学生の英語授業を囑託される	
1905	明治38	1	* 夏目漱石『吾輩は猫である』連載開始	
		8		中国同盟会成立
		9	ポーツマス条約	科举制度、廃止へ
				進士館、法制学堂に改編
		11	清国人を入学せしむる公私立学校に関する規程	
1906	明治39	9	新渡戸稲造校長となる	
		—	この年、一高三高対抗野球試合始まる	
1907	明治40	3		速成科初代学生卒業
		8	「五校特約」結ばれる（注2）	
1908	明治41	4	特設予科設置	
		9	* 夏目漱石『三四郎』連載開始	
1909	明治42	8		師範館、予科学生卒業
				師範館、独立へ（のちに北京師範大学）
		3	寮総代会、留学生は一般の寮生と同等の委員選挙権を持つとする	
		12	清国留学生茶話会。（以後もこのころ開かれるように） 校長以下学校幹部、清国公使館員、寮委員出席	
1910	明治43	3		分科大学開学式（経科、文科、法制科、医科（設立できず）、格致科、農科、工科、商科）
		8	韓国併合	
1911	明治44	2	* 西田幾多郎『善の研究』刊	
		10		武昌起義（辛亥革命の起こり）
1912		1		中華民国成立
		5		京師大学堂、北京大学校に改称（初代校長嚴復）
	大正元	11	留学生との親睦のため日華同学会発足（～1916.4）	
1914	大正3	4	* 阿部次郎『三太郎の日記』刊	
		7	第一次世界大戦	
1915	大正4	1	対華21ヶ条要求	
		6	留学生、中華留日第一高等学校学生同窓会を結成	
		9		陳独秀『青年雑誌』（のち『新青年』）を創刊
1916	大正5	12		蔡元培校長となる（1916–1927）
1917	大正6	1		陳独秀文学科長
				* 胡適「文学改良芻議」発表
				* 陳独秀「文学革命論」発表
		5		* 魯迅「狂人日記」発表
		6	* 倉田百三『出家とその弟子』刊	
1918	大正7	8		漢花園（沙灘）にて新たな建物（紅樓）が竣工
		—		文、理、法科研究所設立

年	元号	月	第一高等学校の歴史	北京大学の歴史
1919	大正8	1		燕京大学設立
		4	特設予科、学科課程を改正（新高等学校令施行）	
		5		五四運動
		6		*李大釗「我的馬克思主義觀」発表
			ヴェルサイユ条約	
		10		中国国民党成立
		—		科を廃止、それに所属する門を系に改める、選科制を実施
1920	大正9	3		女子学生受入開始
		4	支那留学生養成費は国庫より支弁されることに	
1921	大正10	7		中国共産党成立
		12		*魯迅「阿Q正伝」発表
1922	大正11	1		研究所国学門設立
1923	大正12	3	対支文化事業特別会計法成立	
			対支文化事業（のち東方文化事業）発足	
		9	関東大震災	
1924	大正13	—		*孫文『三民主義』講話、「国民政府建国大綱」発表
1925	大正15	8	特設予科規程を制定	
1927	昭和2	3	*川端康成『伊豆の踊り子』刊	
		4		南京国民政府成立
1928	昭和3	1		ハーバード燕京研究所（哈佛燕京学社）設立
		6		中央研究院設立（初代院長蔡元培）
				国民革命軍、北京入城。北伐完成
		12		張学良東北易幟。南京国民政府、全国を統一
1929	昭和4	7	森巻吉校長となる	
1931	昭和6	9	満洲事変	
1932	昭和7	1	上海事変	
		2-7		「満洲国」に対して、国際連盟が調査団を派遣
		5	特設予科廃止。1908年以来、修了者810名	
		6	特設高等科設置	
1933	昭和8	2		国際連盟総会が日本の満洲からの撤兵を求める決議を採択
		3	国際連盟脱退	
1934	昭和9	10	特設高等科生と本科生との親睦のため榎華会発足	
1935	昭和10	3	特設高等科規程中の「支那」が「中華民国及満州国」に改められる	
			特設高等科教室（101号館）一棟の引継ぎを受ける	
		9	駒場へ移転	
		12		一二・九運動
1936	昭和11	1	特設高等科教室（101号館）増築分の引継ぎを受ける	
		12	*河合栄治郎編『学生叢書』始まる	
1937	昭和12	4	特設高等科寄宿舎（明寮）の引継ぎを受ける	
		7	特設高等科に附属予科設置	
			盧溝橋事件	日本軍、北平（北京）占領
		8		清華大学、南開大学とともに湖南へ疎開、三校で長沙臨時大学を設立
		9	寮委員に特設高等科生1名が加わるように	
		11		国民政府、武漢を経て重慶へ
		12	南京事件	
1938	昭和13	4		昆明へ疎開、長沙臨時大学、国立西南聯合大学に改称
		5	特設高等科寄宿舎（明寮）増築分の引継ぎを受ける	
		10		汪兆銘政権
1939	昭和14	3	*『第一高等学校六十年史』刊	
1941	昭和16	12	太平洋戦争	
1945	昭和20	8	特高生、山形県へ疎開のため出発	
			終戦	
1946	昭和21	6		西南聯合大学閉校
		10		北京大学、北平にて復校式
1949	昭和24	1		人民解放軍北平入城
		5	東京大学に教養学部設置	
		6	第一高等学校、「東京大学第一高等学校」となる	
		10		中華人民共和国成立
				大学教育機関の再編により燕京大学の校舎を引き継ぎ、現在地に移転
1950	昭和25	3	東京大学第一高等学校廃止	

太字：日中に関係する当時の主な出来事

注1：張百熙が起草した学制。幼児教育機関にあたる蒙学堂から京師大学堂まで、各段階の学校章程を定めた。実際には施行されておらず、その改訂版である奏定学堂章程（癸卯学制）が1904年1月に施行された。

注2：清朝政府と日本文部省との間で結ばれた教育委託協定。毎年、一高や東京高等師範学校など5つの学校に合計165名の官費留学生が清国から派遣される取り決めで、一高には65名が割り当てられた。清朝滅亡後も中華民国によって受け継がれた。

※第一高等学校編『第一高等学校六十年史』（第一高等学校、1939年）、西沢佑編集代表『写真図説 嗚呼玉杯に花うけて―第一高等学校八十年史』（講談社、1972年）、蕭超然等編『北京大学校史』（北京大学出版社、1988年）、一高自治寮立寮百年委員会編『第一高等学校自治寮六十年史年表』（一高同窓会、1994年）、岡本拓司「第一高等学校校長 森巻吉の生涯―やりやあやれるんだ」（東京大学教養学部編『高校生のための東大授業ライブ 熱血編』東京大学出版会、2010年）、韓立冬『近代日本の中国留学生预备教育』（北京语言大学出版社、2015年）より作成。

（高原智史・宋舒揚 作成）

清国留学生年表

(狩野亨吉による文部省宛て報告書、その他資料を基に作成)

年	元号	日付	出来事	備考
1903	明治36	12/24	文部省より委託の通達。 「留学生三十余名ノ教育ニ関シ萬事当校ニ委託ス」	
1904	明治37	1/17	官費留学生27名東京着。寄宿舎南寮に入る	注1
		1/20	留学生に関する事務員、医員を定める	
		1/22	体格検査	
		1/23-25	学力試験	注2
		1/25-30	都内遊覧	
		1/27	嚶鳴堂にて南寮生徒による留学生歓迎会	
		2/1	官費留学生の陳治安、1名入寮	
		2/4	官費留学生の曾儀進、蘇振潼の2名入寮	
		2/6	始業	注3
		3/8-14	修学旅行。帰校後、南、北、中三寮に分配して一高生と雑居	行先は藤沢、江ノ島、鎌倉、横須賀、北条、八幡等
		3/14	健康診断	
		3/17	官費留学生の唐演、1名入寮	
		3/19	帰国日数を40日間に制限することを定める	
		4/2	歴史と数学を追加	注4
		4/28	王運震「旧詩数首」『校友会雑誌』第136号	
		4/28	周宣「旅行江島鎌倉横須賀房州日記」『校友会雑誌』第136号	
		5/11-12	豊島豊多摩二郡における野外演習	留学生は隊列に加わらずに同行
		5月下旬	新たに寄宿寮一棟起工	
		6/28	周宣「病中雑詩」『校友会雑誌』第138号	
		6月下旬	寄宿寮落成。	
		7/13	信州軽井沢に向け東京発	
		7/15	夏季授業開始	注5
		8/28-29	別所温泉	
		8月下旬	日語の進度に従って3名を卒業させ、学級を再編成。	
		9/14	一高に正式編入。学籍を得る	注6
		10/25	周宣「箱根雑詠」『校友会雑誌』第140号	
		10/25-27	小田原演習	3名隊列に加わり、11名同行
		12月末	日語を一組に再編成。卒業者3名	週8時間
1905	明治38	1-6月	前年度の課程を継続	
		2-8月	9月から東京・京都帝国大学選科に入学する者向けに特別授業	注7
		7月	学年試験	
		夏季休	特別授業	注8
		9月	進級	注9
		9月	京都帝国大学に5名、東京帝国大学選科に2名入学	注10
1906	明治39	1/23	周宣、病のため死去	
		2月	施恩曦、官費生になる	

注1：官費留学生27名。氏名は、杜福垣、王桐齡、顧德鄰、吳宗栻、成雋、馮祖荀、朱炳文、席聘臣、黃芸錫、黃德章、余榮昌、朱獻文、屠振鵬、范熙壬、周宣、朱深、張輝曾、陳堯檀、景定成、鍾廣言、何培琛、劉冕執、史錫綽、劉成志、王舜成、蔣履曾、王曾憲。私費留学5名（王運震、陳繼鵬、王蔭泰、施恩曦、葉克敦）の到着日時は不明だが、彼らの学力試験の解答があるため、おそらく最初からいたと考えられる。

注2：科目及び試験委員は、日語及び日文：谷山初七郎・杉敏介、英語：小島憲之・夏目金之助、独語：丸山通一、仏語：興津辰矩、歴史及び地理：原勝郎、数学：飯島正之助。到着が遅れた4名の留学生も日語日文だけ試験して組分けされた。

注3：留学生特別学級初期時間割

(数字は週ごとの授業時間数)

	日語	日文	体操	合計
甲	11	3	6	20
乙	10	2	6	18
丙	10	2	6	18

受持教官は、日語日文：金澤庄三郎（主任）、日語：金井保三・竹内修二（4月従軍のため岡本正文と交代）、日文：杉敏介、体操：堀井孝澄（主任）・小池常宗・米田源次郎・大沼浮蔵。

注4：法科文科志望者に歴史、理工科農科医科及び法科のうち理財統計、文科のうち哲学専攻者に数学が追加された。歴史と数学の両方を受講した者もいた。

毎週授業時数は、歴史が4時間（原勝郎（6月従軍により、八木金一郎と交代）、数学が5時間（澤田吾一）であった。

注5：軽井沢夏季授業毎週授業時数は下記の通り。

日語 18時間 金井保三 + 2回金澤主任の出張
 数学 12時間 澤田吾一（1週目で終了）→博物学 12時間 脇山三彌+実地採集や実験
 歴史地理 12時間 八木金一郎

博物学の内容に関しては、採点表によると、草花実験（宿題）、植物の観察（宿題）、動物と人生との関係（口述）、博物に就ての所感（口述）、植物の実験、浅間山の記の内容で6度試験が行われた。この時の浅間山登山に関して留学生自身の記録がある。

范熙壬「登浅間山観噴火口」『校友会雑誌』第167号（明治40年5月30日）

景梅九（景定成）著、大高巖・波多野太郎訳『留日回顧 一中国アナキストの半生』（東洋文庫81、平凡社、1966年）

注6：これに前後して学科、年限の変更願いが続出した。なお、編入後も日語の他に教官に嘱託して留学生の特別授業が続けられた。その科目と受持教官は以下の通り。

英語	15時間	森巻吉	数学、物理化学	6時間	友田鎮三
英語、博物	10時間	五島清太郎	数学	5時間	関口彌作
英語、図画	5時間	小島憲之	歴史地理	5時間	磯田良
英語	3時間	畔柳都太郎	哲学	4時間	岩元禎
独語	2時間	藤代禎輔	法政	4時間	中村政次
独語	3時間	丸山通一	物理化学	4時間	菅沼市蔵
独語	5時間	福岡博			

注7：特別授業は、週4時間かけて以下の授業が実施された。

堀田貢 法制経済の大意
 岩元禎 倫理論理心理の概略

注8：帰国者多数により、受講した官費留学生はわずか3名だった。表には載っていないが、杜福垣も授業に励んだ記述がある。

（数字は週ごとの授業時間数）

	日語	独語	英語	物理	化学
馮祖荀	6	9			
蔣履曾	6	9		9	9
黄徳章	6	3	6		

受持教官は以下の通り。

日語：金井保三、英語：森巻吉、独語：丸山通一、物理：関口彌作、化学：菅沼市蔵

注9：第二部一年三之組（工理農科）と第三部一年二之組（医科）は留年ではなく、先に学期延長を許可されて予科に在籍していた者がこの年に本科に入った。留学生全体の外国語と数学の学力に難があり、馮祖荀、蘇振潼、施恩曦以外は本科生と別授業を受けた。科目と受持教官は以下の通り。

日語：今井彦三郎、英語：森巻吉・五島清太郎・金澤庄三郎・和田正幾・畔柳都太郎・クラーク、独語：岩元禎・丸山通一・藤代禎輔・メンゲ・福岡博・保志虎吉・平塚定次郎・リーゲルスベルゲル、歴史：原勝郎、論理及び心理：松本文三郎、数学：保田棟太・藤原松三郎・関口彌作・松林常吉・板橋盛俊、図画：小島憲之、動物植物：五島清太郎、物理：須藤傳次郎、化学：菅沼市蔵、地質鉱物：廣瀬昶芳、法制経済：大河平隆光、体操：小池常宗・大沼浮蔵・米田源次郎。

注10：京都帝国大学には、黄徳章、朱獻文、曾儀進、顧徳鄰、蔣履曾、東京帝国大学には、唐演、劉成志が進学した。東京帝大に進んだ2名について、劉成志は明治38年3月下旬から9月末の6ヶ月間、唐演は明治38年6月下旬から翌年2月までの8ヶ月間一時帰国しており、そのため狩野は下書きに「此二人ノ大学ニ於ケル修業上ノ困難察スルニ余アル」と記していた。

（鶴田奈月 作成）

展示品目録（会場1）

	展示物	所蔵先（出典）	成立年	作成者
1	空から撮影された移転当時の駒場キャンパス	東京大学駒場博物館	1936年～37年頃	不明
2	第一高等学校平面略図	『第一高等学校六十年史』	1939年	第一高等学校
3	「特設高等科教室」図面	東京大学駒場博物館	未詳	不明
4	「特設高等科・物理学・化学・生物学・特別教室」図面	東京大学駒場博物館	未詳	不明
5	留日学生および一高特設予科・高等科修了生数の統計	韓立冬『近代日本の中国留学生预备教育』（北京語言大学出版社、2015年）5頁、二見剛史「第一高等学校における中国人留学生教育」（『国立教育研究所紀要』第95集、1978年）表2、第一高等学校『第一高等学校六十年史』（第一高等学校、1939年）593頁		韓立冬 二見剛史 第一高等学校
6	大正六年特設予科修了証書	東京大学駒場博物館	1917年	第一高等学校
7	卒業写真（特設高等科）	東京大学駒場博物館	1935年3月	不明
8	特設高等科教室（101号館）の外観	東京大学駒場博物館	未詳	不明
9	森巻吉と夏目漱石	東京大学駒場博物館	1914年	不明
10	本郷から駒場への行軍	東京大学駒場博物館	1935年9月14日	不明
11	「一高前駅」の周辺を闊歩する一高生	東京大学駒場博物館	未詳	不明
12	寮の廊下で隔てられた自習室と寝室	東京大学駒場博物館	未詳	不明
13	留学生・張興漢の活躍（昭和7年5月の春季運動会にて）	東京大学駒場博物館	1932年5月7日	不明
14	留学生・張興漢らの優勝写真	東京大学駒場博物館	1936年2月18日	不明
15	留学生の寮生活と日本人学生との関わり	東京大学駒場博物館	1936年 9月、10月	杉山伊佐武 蔡耀祺
16	現在の駒場キャンパスの航空写真	東京大学大学院 総合文化研究科教養学部 （共通技術室）	2014年11月21日	滝澤勉 （撮影者）

展示品目録（会場2）

資料番号	資料タイトル	所蔵先（出典）	成立年	作成者
田1	「一高入学式式辞」	東京大学駒場図書館	明治32年（1899）9月	狩野亨吉
田2	『校友会雑誌』第90号	東京大学駒場図書館	明治32年（1899）10月30日	不明（第一高等学校生徒）
田3	『清国京師大学堂留学生二関スル第一年報告書』草稿	東京大学駒場図書館	明治38年（1905）1月	狩野亨吉
田4	『校友会雑誌』第133号	東京大学駒場図書館	明治32年（1899）10月30日	狩野亨吉
田5	留学生教科書一覧 附『英語文法会話作文』	東京大学駒場図書館	明治37年（1904）	狩野亨吉
田6	留学生鐘廣言の谷山初七郎宛書簡	東京大学駒場図書館	明治37年（1904）頃か	鐘廣言
田7	夏季講習講師出発及授業開始等予定	東京大学駒場図書館	明治37年（1904）	狩野亨吉
田8	私費留学生月費の領収書	東京大学駒場図書館	明治38年（1905）3月3日	谷山初七郎
田9	『清国京師大学堂留学生二関スル第二年報告書』	東京大学駒場図書館	明治39年（1906）	狩野亨吉
田10	『朝華夕拾』所収「藤野先生」	個人蔵	昭和22年（1947）	魯迅著 松枝茂夫訳
川1	高楠順次郎書簡	東京大学駒場図書館	明治32年（1899）6月5日	高楠順次郎
川2	章宗祥書簡	東京大学駒場図書館	明治37年（1904）2月12日	章宗祥
川3	服部宇之吉書簡（1）	東京大学駒場図書館	明治37年（1904）1月7日	服部宇之吉
川4	「京師大学堂官派外洋留学生章程」	東京大学駒場図書館	明治37年（1904）1月以前	服部宇之吉
川5	服部宇之吉書簡（2）	東京大学駒場図書館	明治37年（1904）9月27日	服部宇之吉
川6	巖谷孫蔵書簡	東京大学駒場図書館	明治37年（1904）9月28日	巖谷孫蔵
川7	服部宇之吉書簡（3）	東京大学駒場図書館	明治37年（1904）1月11日	服部宇之吉
鶴1	留学生名簿	東京大学駒場図書館	明治37年（1904）1月か	不明
鶴2	学力試験 書取解答	東京大学駒場図書館	明治37年（1904） 1月23-25日か	杜福垣
鶴3	『京師大学堂留学生二関スル第一年報告』	東京大学駒場図書館	明治38年（1905）1月	狩野亨吉
鶴4	「登浅間山観噴火口」（『校友会雑誌』第167号）	東京大学駒場図書館	明治40年（1907）5月30日	范熙壬
鶴5	清国留学生書簡（1）	東京大学駒場図書館	明治37年（1904）か	朱獻文

鶴6	清国留学生書簡（2）	東京大学駒場図書館	明治38年（1905） 8月21日	杜福垣
鶴7	清国留学生書簡（3）	東京大学駒場図書館	明治38年（1905） 9月か	黄徳章、曾儀進、朱獻文、 顧徳鄰、蔣履曾
高1	森巻吉履歴書	東京大学駒場博物館	昭和3年（1928）	森巻吉
高2-1	特設高等科入学志願者選抜試験問題綴正本	東京大学駒場博物館	昭和8年（1933）3月	第一高等学校
高2-2	特設高等科入学志願者選抜試験問題綴副本	東京大学駒場博物館	昭和8年（1933）3月	第一高等学校
高3	昭和15年度第一高等学校教科書目録	東京大学駒場博物館	昭和15年（1940）か	第一高等学校
宇1	特設高等科教室（101号館）と寄宿寮	個人蔵	昭和13年（1938）以降	不明
宇2	駒場移転直前の全寮茶話会 （『寄宿寮委員記録』第137期）	東京大学駒場博物館	昭和10年（1935）5月21日	澄田智
宇3	「寮生諸君の燈下に送る（読書調査）」 （『向陵時報』第77号）	東京大学駒場博物館	昭和11年（1936）11月25日	不明
宇4	棣華会開催の案内と会則	東京大学駒場博物館	昭和10年（1935）5月30日	澄田智
宇5	「東洋の抱く文化史的使命の完成へ ——棣華会大会に際し寮生諸君に訴ふ——」	東京大学駒場博物館	昭和11年（1936）6月15日	木村善隆・隅谷三喜男・猪 野誠治・萩原光雄・澄田 智・本田昌男・蔡耀祺・楊 開濟・林坤義ほか
宇6	「東洋の文化使命——棣華春季大会」 （『向陵時報』第85号）	東京大学駒場図書館	昭和11年（1936）6月25日	木村善隆・隅谷三喜男・猪 野誠治・萩原光雄・澄田 智・本田昌男・蔡耀祺・楊 開濟・林坤義ほか
宋1	陸上運動部集合写真	東京大学駒場博物館	昭和10～11年（1936～37） 頃	不明
宋2	対三高戦応援団微文	東京大学駒場博物館	昭和11年（1936）6月26日	第一高等学校寄宿寮委員
宋3	昭和十一年度対三高対校戦 選手及応援団幹部氏名	東京大学駒場博物館	昭和11年（1936）11月25日	第一高等学校寄宿寮委員
宋4	対三高戦応援団写真	東京大学駒場博物館	昭和11年（1936）7月15日	不明
宋5	『向陵時報』対三高戦記事 （昭和11年（1936））	東京大学駒場博物館	昭和11年（1936）9月17日	第一高等学校寄宿寮
宋6	「百米」出発！刹那！！	東京大学駒場博物館	昭和11年（1936）7月15日	不明
宋7	対三高戦五年連勝全国高校大会制覇記念メダル	東京大学駒場博物館	昭和11年（1936）	不明
宋8-1	春季運動会陸上運動部メダル（表）	東京大学駒場博物館	昭和11年（1936）	不明
宋8-2	春季運動会陸上運動部メダル（裏）	東京大学駒場博物館	昭和11年（1936）	不明
宋9	向陵訪中団東北地区旅行報告 （『一高同窓会会報』第253号）	東京大学駒場博物館	平成6年（1994）11月15日	柳澤一誠

主要参考文献一覧（刊行年順）

- ・第一高等学校寄宿寮編『向陵誌』（第一高等学校寄宿寮、1939年）
- ・第一高等学校編『第一高等学校六十年史』（第一高等学校、1939年）
- ・柴五郎述・服部宇之吉著、大山梓編『北京籠城・北京籠城日記 付北京籠城回顧録』（東洋文庫53、平凡社、1965年）
- ・景梅九著、大高巖・波多野太郎訳『留日回顧 一中国アナキストの生涯』（東洋文庫81、平凡社、1966年）
- ・内田祥三『内田祥三先生作品集』（鹿島研究所出版会、1969年）
- ・西沢信編集代表『写真図説 嗚呼玉杯に花うけて——第一高等学校八十年史』（講談社、1972年）
- ・蔭山雅博「清末における教育近代化過程と日本人教習」（阿部洋編『日中教育文化交流と摩擦——戦前日本の在華教育事業』第一書房、1973年）
- ・二見剛史「第一高等学校における中国人留学生教育」（『国立教育研究所紀要』第95号、1978年3月）
- ・蕭超然等編『北京大学校史』（北京大学出版社、1988年）
- ・阿部洋『中国近代学校史研究 清末における近代学校制度の成立過程』（福村出版、1993年）
- ・一高自治寮立寮百年委員会編『第一高等学校自治寮六十年史』（一高同窓会、1994年）
- ・一高自治寮立寮百年委員会編『第一高等学校自治寮六十年史年表』（一高同窓会、1994年）
- ・川上哲正「景梅九と辛亥革命」（『学習院史学』第34号、1996年3月）
- ・夏目賢一「第一高等学校における留学生教育の再編と日中関係——特設予科および特設高等科の事例——1908年～1937年」（『東京大学史紀要』第25号、2007年3月）
- ・岡本拓司「第一高等学校校長 森巻吉の生涯——やりゃあやれるんだ」（東京大学教養学部編『高校生のための東大授業ライブ 熱血編』東京大学出版会、2010年）
- ・韓立冬『近代日本の中国留学生预备教育』（北京語言大学出版社、2015年）



一高中国人留学生と101号館の歴史展

主催：東京大学東アジア藝文書院（EAA）

共催：科学研究費・基盤研究（C）「狩野亨吉文書の調査を中心とした近代日本の知的ネットワークに関する基礎研究」（研究代表者：田村隆）

協力：東京大学大学院総合文化研究科・教養学部、駒場図書館、駒場博物館

監修者：石井剛（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻・教授、東アジア藝文書院・副院長）

執筆者：田村隆（東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻・准教授）

宇野瑞木（東京大学東アジア藝文書院・特任研究員）

川下俊文（東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻・博士課程）

高原智史（東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻・博士課程）

宋舒揚（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻・博士課程）

鶴田奈月（東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻・修士課程）

編集者：高山花子（東京大学東アジア藝文書院・特任研究員）

デザイン協力：立石はな（東京大学東アジア藝文書院・特任研究員）

お問い合わせ先



発行者：東京大学東アジア藝文書院（EAA）

2020年3月20日 初版第1刷発行

2020年3月25日 初版第2刷発行

2020年6月30日 初版第3刷発行

※本展示に関わるパンフレット・展示品等の中に現代では使わない不適切な表現がありますが、原文の歴史性を考慮し、そのままとしました。

なお、本展示開催にあたりまして、貴重な資料をご提供くださった東京大学駒場博物館および東京大学駒場図書館の方々に深謝申し上げます。